

第27回(平成30年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業

ආයුතොවන්



アーユーボーン



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人 鹿児島県国際交流協会

は じ め に



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
会長 弓場 秋信
(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、平成3年にマレーシアに派遣以来、今年27回目を迎えました。開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通して、国際性豊かな青少年を育成することを目的に、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で実施しています。これまで、マレーシア、インドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアの6ヶ国に県下一円から331名の中高生を派遣しました。

今年の派遣国は、予算、本県出身者の協力隊員の有無、治安状況、ホームステイ先の確保、派遣中隊員数及び職種等から候補国をリストアップしました。そして本県出身者が派遣中の東チモールとフィリピンを候補として調査しましたが、両国ではホームステイ先の確保が難しいことが判明しました。そこで、過去の派遣国も含め現在協力隊員が活躍しているアジアの国々を再調査したところ、現在アジアで最大の派遣者数を誇り、鹿児島からも過去23名が派遣され、ホームステイ先探しに在スリランカ人の協力が得られたことからスリランカに決定しました。

1981年に協力隊派遣が始まったスリランカは、シンハラ人、タミル人、ムーア人等の民族が住む多民族多文化社会です。過去には26年に及ぶタミル人とシンハラ人の民族紛争がありましたが、2009年5月終結し、現在は民族の融和が進み平和を取り戻しています。

本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、枕崎市、南九州市、南さつま市から推薦の12名と、企業の協賛を得ての実行委員会枠3名は、2回の事前研修でシンハラ語、スリランカ事情、青年海外協力隊活動と国際協力、日本・鹿児島について学び、7月25日福岡・香港を経由してスリランカを訪問しました。

団員は、国際協力機構JICAスリランカ事務所で、スリランカにおける青年海外協力隊事業や国際協力等について学んだ後、コロンボ市から東北東に45kmのホームステイ先のウラポラ地区に移動しました。一人でホームステイする4泊5日の間には、コロンボ市郊外のデヒワラ国立動物園で餌の栄養指導を担当する山尾隊員、ケゴール県の保健所で保健師として活動する長部隊員の現場訪問、ヤタワカ小学校での文化交流、そして村民との文化交流を行なっています。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたことが綴られた報告書『アーユーボーワン (අයුබෝඩ්පා)』を作成致しましたので、多くの皆様にご覧いただければ幸甚に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力をいただいた共催市、協賛企業、国際協力機構JICA九州センター、JICAスリランカ事務所、心温まるもてなしでホームステイを受け入れていただいたウラポラ地区ミーガルラ村の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますとともに、今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

もくじ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

ごあいさつ

鹿児島県PR・観光戦略部

部長 川野 敏彦

1

第27回（平成30年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

2

参加団員等名簿

3

スケジュール

4

地図

5

体験事業ドキュメント（総集編）

6

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

団員が感じたこと

17

- 「スリランカで見えたこと」
- 「スリランカで学んだこと」
- 「世界で通じる「おもてなし」の心」
- 「スリランカで私が感じたこと」
- 「スリランカという異国の地で感じたこと」
- 「日本とスリランカの違いと共通点」
- 「スリランカ研修で学んだこと」
- 「スリランカでのホームステイをして」
- 「スリランカで学んだことと今後の課題」
- 「初めての外国で学んだこと」
- 「目標」を見つけ出せた研修」
- 「初めての経験」
- 「スリランカ研修で変わった自分の夢」
- 「スリランカに触れて」
- 「ぼくの挑戦」

池 亀	美 羽
木 下	耀 太
永 谷	玲葉奈
松 山	和 子
丸 山	健 生
栄 村	茉里香
園 田	玲 音
板 元	麗
杉 田	百 花
小 宮	那々花
鮫 島	舞 雪
今 村	心 美
福 田	正 宗
今別府	幸 芽
徳 永	隼 也

団長報告

32

「第27回 鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書」

弓場 秋信（鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長）

同行者感想

33

- 「見覚えのある風景」
- 「スリランカ体験事業を終えて」
- 「国際協力体験事業に参加して」
- 「スリランカに魅せられて」
- 「スリランカでの日々を思い出しながら」

徳 田	洋
林 裕	佳
上 野	陽 子
緒 方	隆
下 山	倫

新聞記事（南日本新聞）

38

参考資料

- 「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要
- 「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

44

45

ご あ い さ つ



鹿児島県PR・観光戦略部長
川野敏彦

「第27回(平成30年度)鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。これも、事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ、関係者の御支援・御苦労のたまものであり、心から敬意を表します。

また、皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力に関する施策の推進に格別の御協力をいただいておりますことに対しまして、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では、7月25日から8月1日まで7泊8日間の日程で、スリランカを訪問し、現地で動物園飼育員、保健師として指導活動を行っている青年海外協力隊員2人の活動現場を視察したほか、現地家庭でのホームステイ、現地の小学生との交流等を体験したと伺っております。

今回の訪問国であるスリランカは、1952年に日本との国交が樹立されて以来、貿易、経済・技術協力を中心に良好な関係が続いております。2018年はスリランカ独立70周年であり、東京でスリランカの文化理解と観光促進のための事業がスリランカ政府主導で進められていることなどからも、日本とスリランカの関係はより一層親密になっていると思います。

団員の皆さんは、8月7日に県庁を訪問し、県PR・観光戦略部次長及び県教育次長に帰国報告をされました。スリランカの人々の心の温かさや、歴史・生活習慣・文化の違いによる戸惑いや驚きの体験談、青年海外協力隊員の活動を現地で視察した感想など、多岐にわたりたいへん興味深いお話をいただいたとお聞きいたしました。

今回の訪問で、団員の皆さんのが自分の目で見て、感じ、考えてきたことは、実際にスリランカへ足を運ばなければ体験することのできない、たいへん貴重なものだと思います。それらを心に深く刻み、実行委員会の方や御家族、渡航先でお世話になった方など事業実施を支えてくださった全ての方々への感謝の気持ちを忘れず、国際交流・国際協力の担い手として、御活躍いただくことを希望しております。

また、今後も様々な機会を捉えて、国際交流・国際協力や国際社会等についての学習を深められ、皆さんの今後の進路決定等に活かしていかれることを期待しております。

最後に、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の今後ますますの御発展と、関係の方々及び団員とその御家族の皆様方の御健勝・御活躍を祈念いたします。

第27回（平成30年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

1 主 催	鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 ※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 青年海外協力隊鹿児島県OB会 公益財団法人鹿児島県国際交流協会	
2 共 催	鹿児島市、鹿屋市国際交流協会、枕崎市教育委員会、 霧島市国際交流協会、南さつま市友好交流推進協議会、 南九州市教育委員会	
3 後 援	鹿児島県 鹿児島県教育委員会 独立行政法人国際協力機構九州センター	
4 協 力	駐日スリランカ民主社会主義共和国大使館	
5 協 賛	(株)鹿児島銀行 城山観光(株) 鹿児島空港ビルディング(株) 南国殖産(株) 鹿児島トヨタ自動車(株) (株) Misumi 鹿児島ヨコハマタイヤ(株) (株)南日本銀行 キンコ-醤油(株) (株)山形屋 小正醸造(株) (株)レイメイ藤井 薩摩酒造(株) 弓場貿易(株) (株)下堂園	
6 事業の流れ	4月～5月 募集・団員決定 6月16日(土) 第1回事前研修 6月30日(土)～7月1日(日) 第2回事前研修 7月25日(水) 出発 8月1日(日) 留学 8月7日(火)～8月16日(木) 表敬訪問 8月19日(日) 報告会 9～10月 報告書作成	
7 派遣国	スリランカ民主社会主義共和国	
8 派遣期間	平成30年7月25日(水)～8月1日(水)	
9 派遣人員	(1) 参加者 15名 (2) 引率者 6名	

参加者団員等名簿

■ 団 員

	名 前			性別	学 校	学年	市 町
1	いけ 池	がめ 亀	み 美	う 羽	女 鹿児島純心女子高等学校	3	鹿児島市
2	きの 木	した 下	よう 耀	た 太	男 鹿児島大学教育学部附属中学校	3	鹿児島市
3	なが 永	たに 谷	れ ゆ	よ な 玲葉奈	女 鹿児島大学教育学部附属中学校	3	鹿児島市
4	まつ 松	やま 山	わ 和	こ 子	女 鹿屋市立第一鹿屋中学校	1	鹿屋市
5	まる 丸	やま 山	けん 健	せい 生	男 鹿屋市立輝北中学校	3	鹿屋市
6	さかえ 栄	むら 村	まり 茉	り か 香	女 鹿児島県立川辺高等学校	2	枕崎市
7	その 園	だ 田	れ 玲	のん 音	女 鹿児島県立川辺高等学校	3	枕崎市
8	いた 板	もと 元	うらら 麗		女 龍桜高等学校	2	霧島市
9	すぎ 杉	た 田	もも 百	か 花	女 鹿児島県立国分高等学校	2	霧島市
10	こ 小	みや 宮	な 那々	な 花	女 鹿児島県立川辺高等学校	2	南さつま市
11	さめ 鮫	しま 島	ま 舞	ゆ 雪	女 鹿児島県立川辺高等学校	2	南さつま市
12	いま 今	むら 村	ここ 心	み 美	女 鹿児島県立川辺高等学校	2	南九州市
13	ふく 福	だ 田	まさ 正	むね 宗	男 鹿児島県立鹿屋農業高等学校	3	志布志市
14	いまべつ 今別府	ぶ 幸	こう 幸	め 芽	女 鹿児島高等学校	2	姶良市
15	とく 德	なが 永	じゅん 隼	や 也	男 龍郷町立赤徳中学校	1	龍郷町

■ 同行者

		名 前			性別	備 考	
1	団 長	ゆみ 弓	ば 場	あき 秋	のぶ 信	男	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長
2	調 整	とく 徳	だ 田	ひろし 洋		男	(公財)鹿児島県国際交流協会 総務企画課長
3	調 整	はやし 林	ゆ 裕	か 佳		女	クラーク記念国際高等学校 鹿児島キャンパス 教諭 青年海外協力隊スリランカOG(日本語教師)
4	健康管理	うえ 上	の 野	よう 陽	こ 子	女	十島村役場 保健師 青年海外協力隊バヌアツOG(看護師)
5	マスコミ	お 緒	がた 方	りゅう 隆		男	南日本新聞社 編集局報道部 記者
6	マスコミ	さが 下	やま 山	ひとし 倫		男	南日本放送 報道局報道部 記者

スケジュール

月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月 25日	水	鹿児島中央駅 鹿児島中央駅 博多駅 福岡空港 香港 香港 コロンボ	9:40 10:48 発 12:13 着 15:10 発 17:45 着 20:15 発 23:05 着	新幹線さくら552 CX5343 CX611 バス	集合・結団式 福岡空港へ移動 チェックイン ホテルへ移動	
7月 26日	木	コロンボ ガンパハ県ウラポラ地区	11:00 ~ 12:30 15:00	バス	JICA スリランカ事務所 表敬 ホームステイ先へ移動	ホームステイ
7月 27日	金	コロンボ ガンパハ県ウラポラ地区	10:30 ~ 12:00 15:00 ~ 16:00	バス	青年海外協力隊活動視察 【動物学：山尾 紗代 隊員】 場所：デヒワラ動物園 ヤタワカ小学校との交流	ホームステイ
7月 28日	土	ガンパハ県ウラポラ地区			ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月 29日	日	ガンパハ県ウラポラ地区			ホストファミリーと過ごす 夜：お別れ会	ホームステイ
7月 30日	月	ガンパハ県ウラポラ地区 ケゴール県	10:00 13:00 ~ 15:00	バス	村とのお別れ 青年海外協力隊活動視察 【保健師：長部 千寿 隊員】 場所：デヒオウィタ保健所	ホテル
7月 31日	火	コロンボ		バス	コロンボ視察（周辺観光） ・ヒンズー教寺院 ・ジャヤワルダナ記念館 他	
8月 1日	水	コロンボ 香港 香港 福岡空港 鹿児島	0:20 発 8:25 着 9:35 発 14:00 着 19:00 着	CX610 CX5342 バス	解団式（県民交流センター）	機内泊

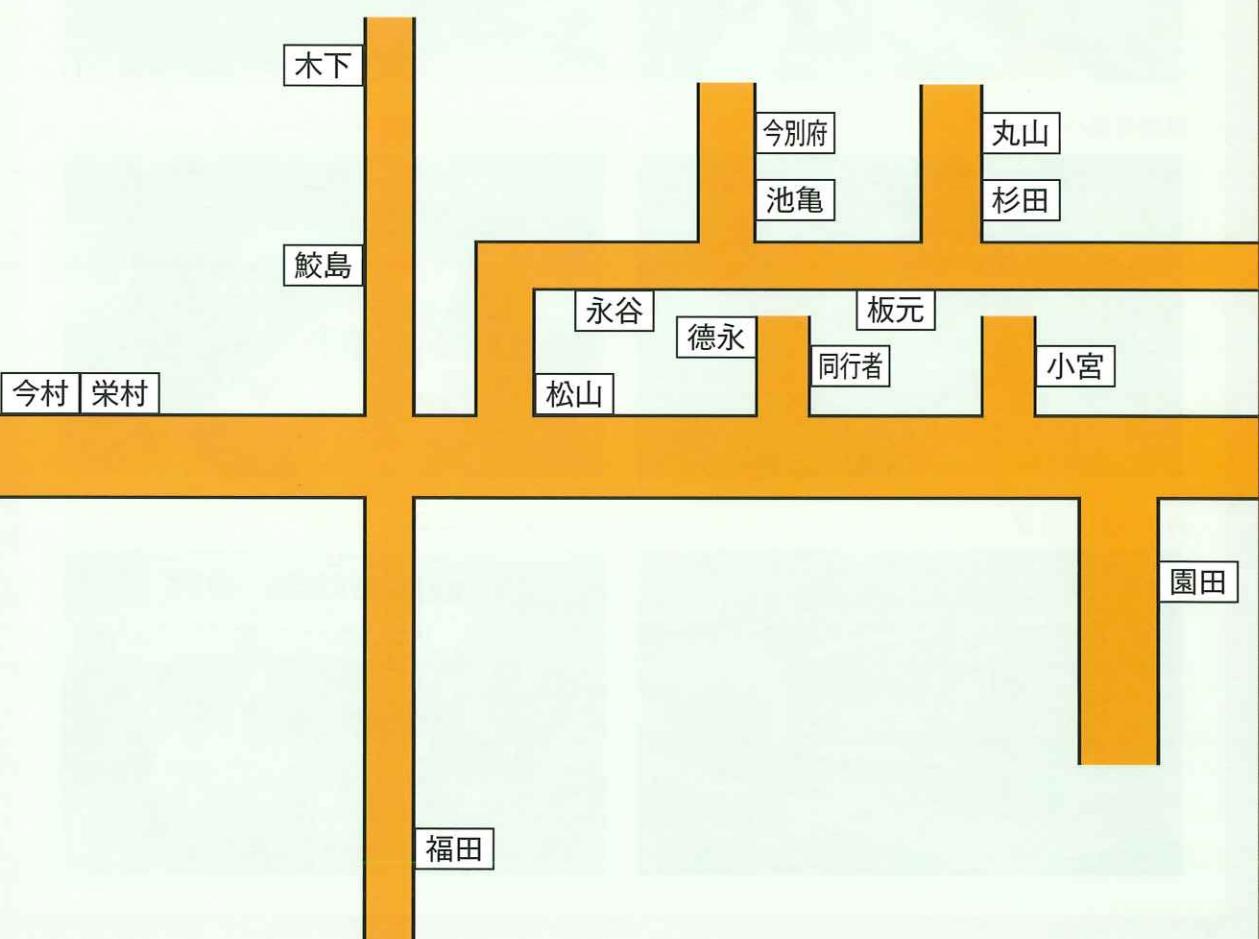
地図



スリランカの州区分地図



ウラポラ地区ホームステイ先地図



体験事業ドキュメント（総集編）

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

6月16日(土), 6月30日(土)～7月1日(日)

第1回・第2回事前研修

体験事業についての説明



語学講座（シンハラ語）



語学講座（自習時間）



青年海外協力隊 体験談



現地の食べ方の体験



現地での出し物の話し合い



おはら節の練習



事前研修を終えて



7月25日(水)

結団式・出発



この1週間の目標は!?

「夢を見つける」「異文化を体験する」

「発展途上国の現実を理解して、日本生活を見直す」

「現地の人とたくさん交流していい時間にする」

「少しでも自分やみんなが笑っていられる時間が増えるよう努力する」

団員の言葉



「この夏一番の思い出にする」

「スリランカの文化を吸収!そして日本文化を伝える」

「現地の人と友達になる」

「たくさんのこと学びこれから将来に役立つ知識を増やす」

「スリランカの良いところをたくさん見つける」

団員の言葉

7月26日(木)

午前：JICAスリランカ事務所 訪問



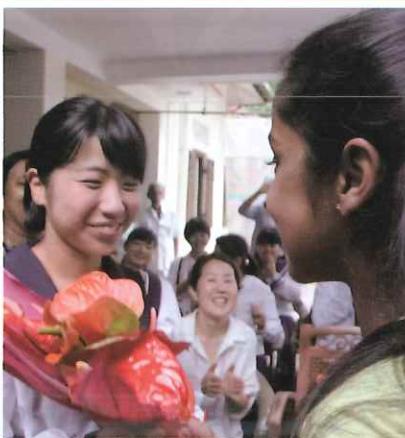
「車のクラクションの音がとても大きくて印象的」

「一番興味深かったのは、介護・保育施設に入れるという意識が国民の中で少ないとということだった。自分の家族の面倒は自分で看るという心が、広く浸透しているのだなと感じた。」

池亀 美羽

7月26日(木)

午後：入村式・ホストファミリーとの対面（ウラポラ地区）



「お母さんたちが日本語を勉強していた。とてもうれしい。」
今別府 幸芽

「ホストファミリーはとても優しく出迎えてくれた。家に着いたとき、上手くコミュニケーションが取れず、会話帳を必死に読んだり指で指したりしていた。」

福田 正宗



7月27日(金)

午前：青年海外協力隊活動現場視察（山尾紗代 隊員・動物学）
国立動物園局デヒワラ動物園



「周りの方々からたくさん褒められていた山尾さん。もし自分が将来協力隊員として海外に行つたら、あんな風に言ってもらえたなら嬉しい。」

永谷 玲葉奈



「日本では当たり前だ」と思っていることでも、スリランカの人には当たり前ではないと言うことがよく分かった。意識ややり方を変えることはすごく難しいと思った。」

鮫島 舞雪



7月27日(金)

午後：ヤタワカ小学校との交流会



「ウェルカムジュースをふるまつていただき、本当に歓迎されているなど心から思った。子どもたちに笑顔を見せると、向こうも照れながらアイコンタクトを取ってくれて有り難かった。」

丸山 健生



「学校は山の中に
あつた。遊具は少なく、
校庭と呼べる運動場
も無かつた。生徒達は
とても小さかつた。」

松山 和子



7月28日(土)
ホストファミリーと過ごす



「学校に来ていた子どもたち
10名くらいとクリケットをした。
日本では女子も野球をする
から一緒にしようと言うと、
3人中1人がしてくれて嬉し
かった。」

徳永 隼也



「お互いに分からないときは、ジェスチャーを用いて
コミュニケーションをとった。コミュニケーションが
一番不安だったが、言葉の違いは乗りこえられること
を体験できて良かった。ホームステイはすごく楽しい。
辛いのが苦手な私に辛くない料理を作ってくれたり、いつも手を握って行動してくれる。感謝し
かない。」

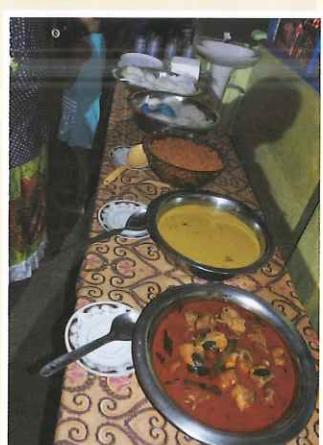
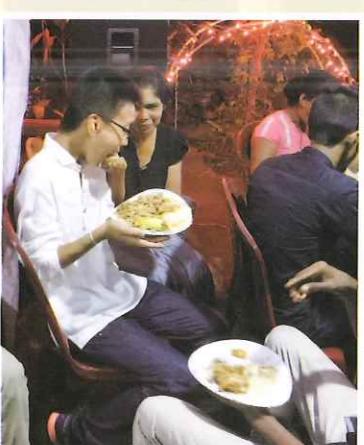
今村 心美

7月29日(日)
ホストファミリーとのお別れ会

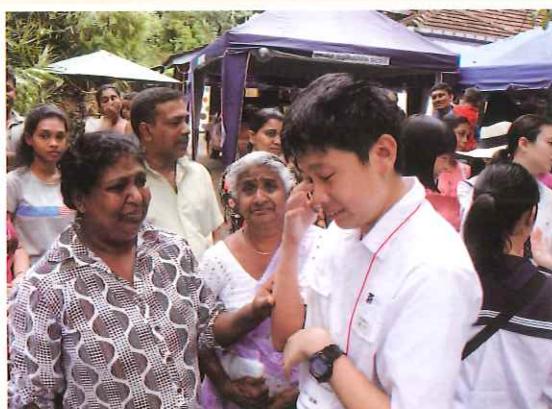


「ウラポラの人達はすごく心
が温かく優しく、この村で
ホームステイができる、とても
嬉しかった。」

園田 玲音



7月30日(月)
午前：村とのお別れ会



「本当に帰りたくないと思ったし、またホストファミリーや村の人々に会いに来たいと思った。村の人みんなで鹿児島に来て欲しい。スリランカ人の温かさを感じ、自分の悪いところ、良いところを知ることも出来た。」

板元 麗



7月30日(月)

午後：青年海外協力隊活動現場視察（長部千寿 隊員・保健師）
ケゴール県保険局デヒオヴィタ保健所



「食生活についての講演はとても興味深かつた。自分のホストファザーも心臓発作で亡くなつた。このことについて話すホストマザーの顔は忘れられない。国をよくしたいと思う気持ちは、そういうことから生まれるのだ。ユニセフが発表した4つの子ども権利について、「生きる・育つ・守られる・参加する」といった当たり前のことさえ守られない国があることに驚いた。ぜひ青年海外協力隊に参加しようと思う。」

木下 耀太



7月31日(火)
コロンボ視察(周辺観光)



「ヒンズー教のお寺は、とてもきらびやかで大きなものが
多く、興味深かった。ジャヤワルダナ大統領の博物館では、
ジャヤワルダナさんが日本の再出発の後押しをして下さつ
たことを再確認でき、『憎しみは憎しみでは終わらず、愛
することによって終わる』という彼の愛のある言葉をもつ
と日本人にも知りて欲しいと感じた。」

杉田 百花



8月1日(水)
帰国・解団式



8月7日（火）～16日（木）
表敬訪問



「一番スリランカで感じたことは、人の優しさだった。知り合って数日の自分を家族として迎え入れてくれる温かさが嬉しかった。また意識が変わった。自分がそこに居ることに何か意味があるのではないかと思えるようになった。」
今別府 幸芽



「発展途上国イメージが変わった。皆楽しそうで、優しくて、日本から来た自分を受け入れてくれた。最初は孤独を感じたが、スリランカの人々は、たくさん話しかけてくれた。人間はどんな国でも皆同じだと思った。自分の夢を見直す機会になった。」
栄村 莉里香

8月19日（日）
報告会



「この研修がとても良い経験になった。自分だけではできなことがたくさんあるということや、どれだけ今まで支えられているかということも実感した。何がしたいか目標が変わった。今出来ることをしっかりとと考え実行したい。」

小宮 那々花

団員が感じたこと

スリランカで見たこと

純心女子高等学校 3年

池亀 美羽

まず、私が衝撃を受けた事実がある。それは、スリランカは自殺率世界第一位だということだ。この話をしてくれたのは、コロンボにあるデヒオウイタ保健所で、青年海外協力隊員として、保健師をしている長部千寿さんだった。外国人の私たちにも笑顔で話しかけてくれて心から歓迎してくれて、優しい人たちなのになぜ? というのがこの言葉を聞いた瞬間の私の思いだった。失恋で自殺をしてしまう人もいるらしい。私たちはその事実に戸惑いを隠せずにいた。

スリランカは、上座部仏教として有名な通り、袈裟を着たお坊さんを至るところで目ににする。人々はお坊さんが通ると道を開け、ひざまずいて崇拝する。テレビのドキュメンタリー映像で見ていた光景がいざ目の前で起こると完全に委縮してしまった。家では子供たちが毎朝、庭から生花を摘んできて、仏壇に供える。日本で仏壇に向かってお祈りするのは、先祖に向かってするが、スリランカでは先祖というよりむしろ仏陀に礼拝している。仏教の五戒を厳守するため、スリランカの人々は誰にでも優しく、嘘をつかない。そのことがよくわかるのが、介護、保育分野である。

スリランカの一部の都市では保育所が普及しつつあるそうだが、ほとんどの家庭は小学校に入るまでは自宅で面倒を見る。高齢者も同じだ。最期まで世話をすることがスリランカ流の家族に対する優しさなのかもしれない、とコロンボからバスで1時間半ほどのところで、高齢者介護の分野で活動する女性隊員は言った。私自身、日本のように、施設に入れ、最期を迎えるより、スリランカのように家族で世話をしたほうが良いように感じたが、その介護福祉士として働く女性は、日本のように施設に預けることをスリランカでもするべきだと語った。この女性の言葉で最も印象に残ったのが次の言葉だ。「自宅で家族が世話をすることで、寝たきりになってしまう人も多い。もし、私たちのような資格をもつ人とその人が出会っていれば、今その人は元気に歩いているかもしれない。」この言

葉は私の考え方を変えた。作業療法士としてリハビリ職に就きたい私にとって、この言葉はこれから常に胸にある言葉になると思う。せっかく専門的な知識を持つ人が周りにいるのに、相談できる状況にいない人が世界に何人いるのだろうか。私たちが暮らす日本ではすぐ近くに病院があり、相談できるような人は周りにいる。この状況がどんなに恵まれているのか、身に染みて感じる言葉だった。

これからどのような作業療法士になりたいのか、明確なものがなかった私だが、この1週間ではっきりと将来像が見えた気がする。私は、寝たきりになってしまう人を一人でも減らしたい。そして、「もし専門家に相談できいたら、寝たきりにならなくてすんだのに。」という言葉がなくなる社会になるように、作業療法士として、世界に身近な医療を広めたい。そして、作業療法士としてスリランカに赴く機会がいつかあれば、自殺率1位という残酷な現状を変えるお手伝いがしたい。



青年海外協力隊（保健師）：長部 千寿 氏



コロンボにて 本人：右から2番目

団員が感じたこと

スリランカで学んだこと

鹿児島大学教育学部附属中学校3年

木下 耀太

今回私は、アジアの魅力を世界に発信したいという想いからぜひ東南アジアの国(実際は南アジア)に訪れ、アジアを語れるようになる1つのパートとなればと思い、参加しました。また、外国人の人に言語を習うことにとっても楽しさを感じ、私自身も言語を教える立場に立ってみたいと思い、青年海外協力隊も一つの方法だと思っていたことも参加の1つの動機でした。

派遣者にえらばれ、2回に事前研修を経て派遣がとても楽しみでなりませんでした。そして、迎えた7月25日、色々な方からお言葉をいただきスリランカへ出発しました。10時に鹿児島を出て、新幹線で福岡まで行き、福岡空港から香港、そして現地時間の0時くらいに到着したスリランカの空気は生暖かく、若干飲食店のような香りがしました。特に、驚いたわけでもないですが、あの空気は鮮明に覚えています。そして、スリランカでの活動が始まりました。

JICA、青年海外協力隊活動現場、学校訪問、青年海外協力隊との夕食会などすべてが充実していましたが、私は、ホームステイに一番驚いて、大変で、楽しくて、かけがえのない経験になりました。私はホームステイがとても好きで、これまで何度も何度か受け入れてもらったり受け入れたりしましたが、今回が一番意味のあるものでした。ホームステイ中は驚くことだらけで、家に着いて、まずリビングにテレビ、いす、ミシン、仏壇しかなかったのに驚きました。部屋は布で区切り、ドアは玄関のみで、もちろんIHやガスなどではなく、薪で火をおこし、さらにシャワーは外についており環境がとても違い、馴染めるか不安でした。正直1日目は辛さを感じました。自分が恵まれていることを痛感しました。でも、ホストファミリーはいつも一生懸命にもてなしてくれて、とてもありがたかったです。

そして、スリランカの人は近所付き合いが盛んで、半径1km圏内の住民はみんな友達といつても過言でないと思います。そのため、たくさんの友達が家に来てくれて、交流するのがとても楽しかったです。そし

て、日本への執着はなくなり、スリランカへの愛が大きくなっていきました。色々な活動をした後、家に帰るととても落ち着くようにもなりました。環境は辛くても、愛があるから幸せでした。ホストマザーの優しさはとても心に残るし、いつも気を遣ってくれました。夫が亡くなつてシングルマザーとして二人の子供を支えるのはとても大変で辛い中、笑顔でもてなしてくれた母はすごい人でした。ホストブランダーは、すぐ名前を覚えてくれて、遊ぶのに誘ってくれたり、ふざけたりして楽しませてくれ、何より日本の文化を積極的に知ろうとしてくれて充実した国際交流が出来ました。全員がかけがえのない家族となり、別れが辛かったです。このホストファミリーに出会えて本当に幸せでした。そして、この家だったから成長できました。

私は、将来キャビンアテンダントになるのが夢で、世界中を飛び回り、再びスリランカを訪れたいと思います。そして、青年海外協力隊になるチャンスをつかみ、参加したいと思います。そのために、今向き合わなければならぬことに真剣に向き合おうと思います。

そして、鹿児島市、協賛してくださった企業、スリランカで出会った方、先生、そして両親に心から感謝したいです。誠にありがとうございました。



ホストファミリー



ホストファミリーとお別れ会での食事を楽しむ様子

世界に通じる「おもてなし」の心

鹿児島大学教育学部附属中学校3年

永谷 玲葉奈

今回この体験事業に参加して、私はどの国でも共通している「おもてなしの心」というものを感じました。

東京で2020年にオリンピック・パラリンピックが開催されることが決定した時に流行した「おもてなし」という言葉をあなたは覚えていますか。これは昔から日本に伝わる「相手を気づかい、相手のために尽くす」という意味の言葉で、私のホストファミリーに日本のイメージを聞いてみた時も、自然に出てきた言葉でした。特に私がスリランカで「おもてなし」を感じたのは、ホストファミリーと一緒に過ごす中の出来事からでした。

毎朝ホストマザーが手渡してくれるとびきり甘いミルクティー、ルールを教えてもらいながら村のみんなと一緒にしたクリケット、集まりがあった後、必ずトウクトゥクで迎えに来てくれるホストファミリー……

たくさんの人と触れ合う中で感じたやさしさは、日本に帰ってきた今でも心に強く焼き付いたままです。

私はこれまで、「おもてなし」というのは日本にしかない考え方だと思っていたのですが、今回スリランカに行って現地の人のやさしさに触れたことによって、形は違っていても、それぞれの国にはちゃんと相手を思い、もてなす心があるのだということを知りました。

また、今回の事業に参加したことで、これまで不鮮明だった自分の将来のビジョンがはっきりとしたものになりました。派遣前、私は特に目指すものもなく、親に勧められていた医療の道を選択しようとしていました。しかし、今回世界中で利用されているコンピューターなどに関する職業の魅力を知り、もっとそのことについて学びたいと思いました。そのことから、今後の進路をはっきりさせることができました。現在の私の夢は、コンピューターエンジニアとして、いつか青年海外協力隊の一員として海外に技術支援をしにいくことです。その為の勉強を高校で頑張ろうと思っています。

また、今自分が当たり前のことだと思っていること

が、場所や場合が違えば当たり前のことではなくなる、ということも学ぶことができました。蛇口をひねれば飲める水が出てくることや、温かいお湯が日常的に使えること、箸を使って食べ物を食べること、地面が茶色の土でおおわれていること、料理にだしを使うこと……あげていくと枚挙にいとまがないほどたくさんの違いがありました。自分にとっては新しいことでも、それを当たり前だと思いながら過ごしている人いる、ということを改めて再認識することができたのも、今回の大きな収穫だったと思っています。

今回お世話になったホストファミリー、団員の皆さん、同行者の皆さん、応援してくれた家族、激励してくれた友人、先生方、その他たくさんの応援してくださいださった方々に改めて感謝の気持ちを伝えたいと思います。



ホストファミリーと一緒に 本人：右



ホストファミリーと一緒に 本人：左から2番目

団員が感じたこと

スリランカで私が感じたこと

鹿屋市立第一鹿屋中学校1年

松山 和子

私は、スリランカを忘れない。そこで過ごした8日間は、私にとって特別なものになった。

鹿屋を発って16時間。スリランカに到着した。同級生のお母さんがスリランカ人であり、聞いた話を実体験すべく応募したスリランカ研修だったが、4泊のホームステイは不安だらけだった。

バスは村に着いた。大きな看板が目に飛び込んできた。私たちの写真が載った看板を見て、嬉しくなった。とても歓迎されている。そう思った。

スリランカは、農業が盛んな発展途上国だ。行くまでは、物が十分になく、人々はやせ細っていて…、と勝手に終戦直後の日本に重ねて想像していた。

実際に見たスリランカは、予想とは違うことがたくさんあった。食料も教育も充足していた。人々は親しみやすく、人懐っこい。家族を大切にする。家族団らんの時間が多く、笑い声が絶えない。ご飯を薪で炊くなど不便なところもあるが、日本とは大違いな自然と共に存しながらの生活は楽しかった。

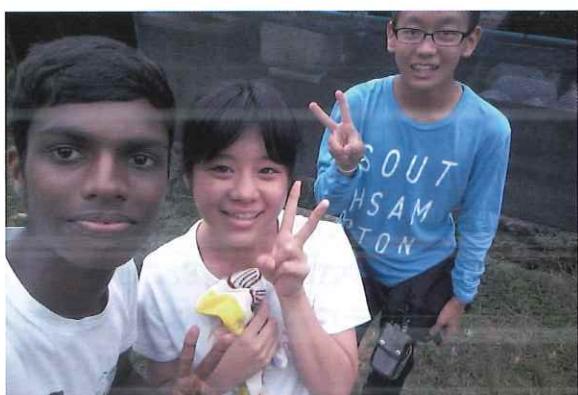
ホストファミリーの愛情を強く感じる出来事があった。ホームステイ最後の夜。ホストファミリーは、別れを惜しみ泣いていた。ホストファザーが「ワコ。ジャパン、ナンギ、ランブータン、デナワ」と大声で語りかけながら部屋に入ってきた。これは、「和子。日本の妹にランブータンをあげるよ」という意味だ。私がランブータンを「ラサイ(美味しい)」と気に入って食べていたことを覚えてくれていたのだ。検疫のため持つて帰ることはできないと伝えると、ホストファザーは泣き始めた。私も泣きそうになった。ファザーの思いに触れ、ここにいたいという思いが胸の中にあふれた。

スリランカの初代大統領は、敗戦国として分断されようとしていた日本を「憎しみは憎しみを終わらせられない。憎しみは愛によって救われる」という言葉で救ってくれた。サンフランシスコ平和条約締結後、世界で一番早く日本と外交関係を結んだのも、スリランカだったそうだ。東日本大震災への支援や追悼を知る

と、スリランカの人々の愛情を改めて感じた。私は、これほど日本人を想い、行動してくれるスリランカのことを知らなかった。そのことを、今回の旅で痛感した。

この貴重な体験を通して、様々なことを学んだ。日本人から見たら不便な生活だが、スリランカの人々は、自分で工夫することを楽しんでいた。日本人は便利な生活をしているのに、不便なことがあると不満を口にする。自分では工夫せず誰かや社会のせいにする。日本の当たり前は、ほかの国では当たり前でないことを知った。ほかの国はどうなのかもっと知りたい、色々な角度からものを見る能够の人になりたいと思った。

これまで、自分の部屋に閉じこもっていることが多かった私が、帰国後は家族との時間を意識して持つようになった。特に、妹との会話を心掛けている。妹が「お姉ちゃんがやさしくなった」と言っていた。私の中の何かが少しずつ変わってきているのかもしれない。



ホストブラザーと一緒に 本人：中央



ホストファミリーと一緒に 本人：前列左

スリランカという異国の地で感じたこと

鹿屋市立輝北中学校3年

丸山 健生

アーユーボーウン(こんにちは)。7月の25日から8月1日の一週間という日程で行われた今回の研修ですが、長いようで、行ってみるととても短いものでした。

今回の研修で僕は、とてもたくさんのこと学ぶことができました。その中でも、特に心に残っていることが二つあります。

一つ目は、言語の壁です。僕らは、スリランカに行く前にシンハラ語の練習や食事の練習として事前研修が二度ありました。その時に「指さし会話帳」というシンハラ語の本をいただきました。「この本があれば大丈夫だな」と自信過剰になっていた僕は、実際にホストファミリーにその本を見ながら鹿児島のことについて紹介しました。しかし、ホストファミリーは僕が何を言っているのか分かっていないようで、本に書いてある文字を見せてやっと理解してくれたようでした。言っていることが伝わらなかったという悲しさもありましたが、書いてある事をそのまま読んでも伝わらない、言語の壁、というものを強く感じました。同じ地球に住んでいる人間同士なのにコミュニケーションがうまく取れないということに、僕は、もどかしさを覚えました。今、僕は、中学校で英語を習っていますが、この経験により他の言語にも興味を持つようになり、将来、英語以外の他の言語も話せるようになります。

二つ目は、日本とスリランカの貧富の差です。事前研修の時に「日本だと百円で売られているリンゴがスリランカでは、六十円で売られている」とシンハラ語講師の先生に言われました。ホームステイ中、僕のホストファミリーが、英語で僕にこう言ってきました。「僕は、将来ソフトウェアエンジニアとして働きたい。そして日本で働きたい。でも、日本に行くお金がない。」そう言われて、僕は、はっとしました。日本だと、高校や大学で高い就職率を売りにしている学校をよく目にします。しかし、スリランカでは、大学もごくわずかな人しか行けず、高校を出ても、就職率もそんな

に高くない、だから、僕が、日本へ就職するための架け橋となって、とホストブラザーは言ってきました。僕も、きっと今回の研修に参加していなかつたら、ホストブラザーと出会ってなかつたら、高校へ行き、そのまま就職という道を選んでいたでしょう。今回、ホストブラザーと出会えたことで、いかに自分が恵まれているか、日本がどれだけ恵まれた国なのか、とてもよくわかりました。この経験を活かし、僕は、世界を視野に見ることができる会社で働きたい、と思うようになりました。

どんなホストファミリーだろう、生活に適応できるかな、など様々な不安と世界を見てみたい、という挑戦心で臨んだ今回の研修ですが、今思うと、本当にやってよかったです、と心から思います。スリランカという異国の地でホームステイをしたという経験は、一生忘れない思い出となり、今後の僕の人生に大きく関わってくるでしょう。貴重な体験をさせてくれたホストファミリーをはじめ、この研修のことを教えてくれた家族、後押ししてくれた学校の先生方に改めて心から感謝したいです。ステウーティー(ありがとう)。



ホストファミリーとのひととき



ホストブラザーと一緒に 本人：中央

団員が感じたこと

日本とスリランカの違いと共通点

川辺高等学校 2年 栄村 茉里香

今回の事業に参加して多くのことを学びました。

まず、この事業に参加する前の私は発展途上国と聞くとやせ細った人が多く、食料も十分にない国ばかりだと思っていました。治安も悪く、怖い、貧しいなどマイナスなイメージしかありませんでした。しかし、今回訪問したスリランカはそんなイメージを覆す国でした。

スリランカを見て最初に驚いたことは、想像より建物が多く建てられており、道路は常に車でいっぱいだったことです。また、車は日本車も走っていたり、現地の人はスマートフォンを持っていたり、日本との共通点がいくつかあったため親近感が湧くこともありました。ですが、やはり整備が行き届いていない道路があったり、野良犬が歩道や道路にいたりと、まだまだ不十分なところもありました。電車にドアがなく今にも押し出されそうだったり、車と車がぶつかりそうになったり、車が来ているのに人々が道路を横切ったりしていて、危険な場面を目にするものもありました。

JICAの事務所訪問や青年海外協力隊の視察に行きました。私は、青年海外協力隊は人を助けるだけのものだと思っていた。しかし、実際は動物園で働いていたり、スポーツを教えていたりと知らなかった青年海外協力隊の活動を知ることができました。海外で自分の好きなこと、好きな仕事ができるということはとても立派だと思いました。自分のやりたいことで困っている誰かを助けられるのはとてもやりがいを感じると思います。日本で同じように働くことと海外で働くのでは、得るもののが違うと思いました。日本は先進国なので、日本の技術や取り組みを海外に広げていくことも大事だと思いました。

また、保健師さんのところに行ったとき、ゴミをあちこちに捨てると聞いて驚きました。日本ではゴミ箱に捨てることが当たり前ですが、国によっては普通ではないということもわかりました。日本の普通が海外では普通ではなく、一つの問題になっていることもあるのだと思いました。

最後に、私が最も印象に残っているのは現地の人たちやホームステイ先の人たちの心の温かさです。初め

て日本を出て言葉の通じない国に行きました。ホームステイ先では言葉がわからず、孤独を感じるときもありました。でも、人というものは不思議なものです。言葉がわからなくても優しく接してくれたり、一生懸命伝えようとしたりしてくれました。国は違えど人にに対する心の優しさは変わらないものなのだと思います。ホームステイ先の人たちは私の本当の家族のように振る舞ってくれました。トイレやお風呂は不便を感じることもありましたが、食事は美味しいくて、ホームステイ先の子ども達は日本のこと興味深く聞いてきました。その何気ない言動が私にとってはとても心強く、心を許すようになりました。

同じ仏教でも信仰の強さが違ったり、手でご飯を食べたりなど、日本では経験できない体験もすることができました。日本にいると海外の文化などに偏見を持つこともあります。実際、海外に行くと現地の人にとってはそれが当たり前で、自分がそれを体験するとその偏見もなくなり、過ごしていくうちに慣れてきました。このような経験を活かして、家族や友達に日本がどれほど贅沢で、当たり前に過ごしているかを伝えています。



ホストファミリーと一緒に 本人：左から3番目



スリランカの街並み

スリランカ研修で学んだこと

川辺高等学校 3年 園田 玲音

今回の研修を通して、日本では知ることのできないことを実際に体験して学ぶことができた。その中でも一番印象に残っていることは青年海外協力隊の活動視察とホームステイである。

青年海外協力隊の活動視察では、日本と同じ職業でもその国で起きている問題によって仕事内容も異なり、その国の文化によって変わっているということを感じた。このように感じることができたのは保健師の協力隊の活動を視察した際であった。その方の働いている保健所は、この方が来る前は、整理整頓がされておらず、注射したあとに貼るガーゼが床に落ちているなど保健所としての衛生管理がしっかりとされていなかったそうだ。それを聞き、私は日本では当たり前ということがほかの国では違うということを強く感じることができた。また、スリランカは生活習慣病が多いということを知り、なぜそうであるかということをホームステイ先で感じることができた。スリランカ人は辛いもの、甘いものの両極端な味と油物をとても好む。だから、スリランカでは生活習慣病が多いのだと考える。

このように日本とスリランカでは抱えている問題が違う。今回の視察で保健師などの青年海外協力隊の方々のその国の問題に対する改善しようという気持ちが強く伝わり、言葉も文化も違う国でそのように働いている姿はかっこよく、どの隊員もいい笑顔であった。私もこの方々のようにほかの人達のために日本とは違う国で働きたいという気持ちが今まで以上に強くなつた。

ホームステイでは、言葉がわからない状態、日本とは異なる生活習慣の中で四日間も過ごすということは、自分にとってとても不安ばかりであった。しかし、実際はそうではなかった。ホームステイ先の村に着くと村の方々の温かい出迎えにとても感動した。私たちのために村中の人々が来ており、現地の飲み物や食べ物でおもてなしをしてくださり、この時点ではスリラン

カ人は優しく、笑顔の素敵なお人達だと感じることができた。ホストファミリーと対面し、家に到着すると家族が家の外で待っていて、とても嬉しく、良いホストファミリーに出会ったと感じた。

ホームステイをしていて自分自身が伝えることができないというよりも、相手が私に対して何と言っているのかわからない時が一番辛かった。理解できれば会話がスムーズに流れていくが、それが出来ないことで日本では感じることのない会話の難しさを感じた。シンハラ語では難しい際に英語を使ったが、その時、英語の大切さを改めて痛感できた。私が困っていてもホストシスターがいつも助けてくれ、伝えたいことをホストマザーに言ってくれたりした。ホストシスターは勉強熱心であり英語や日本語を積極的に学ぼうとしていて、まだ小学生だが、自分も頑張ろうという気持ちになった。

今回の研修を通して文化や青年海外協力隊についてだけではなく人との関わり方についても学ぶことができた。そして、将来の進路に向けての良い経験をすることができ、もっと世界について学びたいという気持ちが強くなった。



青年海外協力隊活動視察の様子



ホストシスターと一緒に 本人：左上

団員が感じたこと

スリランカでの一週間を終えて

龍桜高等学校 2年 板元 麗

私は、スリランカでの国際協力体験事業に参加し、たくさんのことを見ました。

私が、スリランカでのホームステイを通して、何が一番、印象的だったかというと、ホストファミリーや村の人々の温かさです。

ホストファミリーは、初めて会ったときから手を繋いでくれ「あなたは私たちの家族だ」と言ってくれて、すごく温かい嬉しい気持ちになりました。ホームステイをしている間、どこか出かけるときも、親戚のお家にお邪魔するときも、ご飯を食べるため移動するときも、アンマー（お母さん）か妹のウシミラが手を繋いでいてくれました。

村の人々は、自分のホストファミリーでなくても、気遣ってくれたり、知らない人でも、目が合ったら必ずニコッと微笑んでくれます。これは当たり前に思えますが、日本やほかの先進国ではなかなかないことなのではないかなと私は思います。私は、違う国から来た人でどんな人かもわからないのに、微笑んでくれたことが嬉しくて必ず微笑み返しました。微笑んでくれた人の顔を覚えているくらい大切な思い出です。

私はスリランカでの青年海外協力隊の活動視察やJICAスリランカ事務所訪問で、自分が知りたかった青年海外協力隊について詳しく学ぶことができました。また、青年海外協力隊の方々と日本食を食べながらの交流もありました。そのとき、私は保健師の女性の方のお話を聞くことができ、どんな活動を行なっているのか、これまでの活動で、発展途上国をどう思うようになったのかなど、青年海外協力隊の視察の時に質問できなかったことを踏まえて質問することができました。とても勉強になったので、これから先、自分がもし青年海外協力隊になったときに大事な知識として生かしていきたいと思います。

4日間のホームステイ中に、スリランカの学校との交流会がありました。学校に着いた途端、子供たちの楽器を吹きながらのパレードが始まり、花飾りを首に掛けてくれたり、花束をくれたり、ヤシの実ジュースをいただいたりして、歓迎されることがよくわかり、すごく嬉しかったです。交流会では、小学校

の子たちと折り紙をしたり、歌を披露したり、逆に、ダンスを披露してもらったりして楽しかったです。私は折り紙作りの担当で、みんなで子供たちに鶴の作り方を教えてあげたり、かぶとや箱などの折り紙をプレゼントしたりしました。子供たちの反応が良くて、もっと日本について教えたい、日本に来てほしいと思いました。可愛い子供たちの笑顔を見て、嬉しい気持ちになりました。

この4日間のホームステイが終わるお別れの日、私は大号泣でした。たった4日間しかホストファミリーと過ごしていないのに、たくさんの温かさを感じ「帰りたくない、もっと一緒にいたい」と思うようになりました。ホストマザーも一緒に泣いていて、ホームステイ中も何度も言われた「また絶対来てね」をまた最後に言われて、すぐ会いに戻れないのが寂しくて仕方ありませんでした。

1週間ほどのスリランカ生活はとても濃い思い出です。スリランカに来て、ホームステイをして青年海外協力隊について学んで、自分の中で得られたものはすごく大きいと思うので、将来の自分が選ぶ道に生かすことができたらいいと思います。今回の国際協力体験事業はとても良い経験になりました。



ホストファミリーとのお別れ



学校交流の様子

スリランカで学んだことと今後の課題

国分高等学校 2年 杉田 百花

私がスリランカで最も衝撃的だったことは食生活でした。スリランカへ行く前から少し栄養に偏りがあることは、知識として持っていましたが、実際に体験してみると、想像を超えて異常に感じました。朝は甘いお菓子とミルクティーに始まり、その後もご飯と間食のおやつで私の胃袋は常にいっぱいだったように思います。私たちへの歓迎の気持ちもあって、たくさんの食べ物を用意してくれたのかも知れませんが、どこを訪問しても出てくるお菓子の甘さには苦戦させられました。

同時に、スリランカの人の健康がとても心配になりました。実際に、スリランカ人の体型を見ていると、手足が長くスタイルが良いのにも関わらずお腹だけが出来ているという人も少なくありません。また、糖尿病などの生活習慣病の方が多く、心臓・循環器系の病気で亡くなる人が最も多いというお話を伺いました。大きな理由として食生活が関わっていますが「このような事実があっても、ずっと当たり前に続けていた生活を変えること、意識を変えることはなかなか難しい」と保健師の青年海外協力隊の長部さんが仰っていました。難しいからこそ、文化の違う異国の地で健康への意識改革に取り組んでいる長部さんは、とてもかっこよく見えました。言語が全く違うため、伝えたいことがなかなかうまく伝わらなくて悔しいこともあると仰っていましたが、ゴミ箱に折り紙を貼って注意を引いたり、絵を書いてわかりやすいようにしたり、伝わらないなりに工夫して「伝えよう」としているのがすごく印象深かったです。長部さんのように、情熱を持って真っ直ぐに目の前の人や環境と向き合うことが、信頼関係が築けて人々の意識を変える一番の近道なのだと気付かされました。

私の将来の夢は、看護師になって青年海外協力隊の一員として活躍することです。今回の派遣事業に参加を決めたのも、夢に向かって高校生の今だからできる貴重な経験であると思ったからです。実際、自分が

思っていたよりも遥かに素晴らしい経験となりました。青年海外協力隊としての仕事、また海外での生活はそんなに甘いものではないということを再確認できましたし、それ相応の努力と覚悟をしなければならないと感じました。でも、青年海外協力隊になって活躍したいという私の夢は、薄れるどころかますます強まりました。保健師の長部さんのように、国境や人種の壁を越えて、人と真っ直ぐに向き合える看護師になりたいと思っています。そのために今の私がすべきことは英語の勉強だと思います。日本でもスリランカでもあらゆる所であらゆる人に言われます。「英語はできた方がいい」「できて損はしない」と。私よりたくさんの方々が、口を揃えてそう言うので、今の世の中よっぽど英語が大事なんだと改めて感じました。夢を叶えるためにも、今は必死に英語やその他勉強を頑張っていこうと思います。



ホストファミリーと一緒に 本人：左



スリランカの保健所の様子

団員が感じたこと

初めての外国で学んだこと

川辺高等学校 2年 小宮 那々花

私は、スリランカと日本の食文化の違いを知りたいと思いこの研修に参加しました。

私が研修に参加し、印象的だったことは、3つあります。

1つ目は、スリランカの方々の体型です。現地の人の体型は、お腹だけが出ている方が多かったです。私は、ホームステイの中で、その原因が理解できました。ホームステイ先では、毎回の食事の後にお茶を飲んでいました。そのお茶は、コップ一杯のお茶に粉ミルクと砂糖をたくさん入れたとても甘いお茶でした。それを毎食後、1日3回飲み、その他にも、お茶の時間があり、甘いお菓子と一緒に食べます。その他にも、お友達の家へ行く度にお茶を飲みます。私は、これが現地の方のお腹が出てしまう原因なのだと感じました。実際に、青年海外協力隊の保健師の方から現地の方の体型なども気にしているとお聞きしました。

今、スリランカでは、生活習慣病が問題なのだと思います。生活習慣病の問題は、大人になってから、改めようとしても簡単に治るものではないので、保健師の方は、小学生に検診を行なったり指導を行っているようでした。

2つ目は、交通事情の現状です。道路は、舗装はされているものの中央線がないところもありました。一日中ずっと車のクラクションが鳴り響いていました。ずっと鳴っていたので、なぜだろうと思っていると、止まっている車に危険を知らせるために鳴らしていました。日本では、クラクションを鳴らすことは滅多にないことなので、スリランカに着いた時はびっくりしました。また、電車は窓がなく、ドアもありませんでした。だから、ギリギリで乗りこんだり、身を乗り出している人もいました。線路と道路を仕切るもののがなかったので、線路を横切って向こう側に行く人もいました。日本に帰ってきて私は、まずクラクションの音が聞こえないことで、日本に帰ってきたのだと自覚しました。

3つ目は、スリランカの人々と環境です。会う人会

う人が親切にしてくれて、村の人達も私たちのことをとても歓迎してくれました。私は、シンハラ語が通じるか不安でしたが、言葉が話せなくても、表情やジェスチャーなどでわかつてくれ、とても過ごしやすい日々を送りました。

また、日本では、当たり前ということができないこともあります。日本ではシャワーはお湯が使えますが、スリランカでは、お湯は出てこず、冷たい水でした。もちろんなかなか慣れなくて大変でしたが、これも貴重な体験でした。

研修を通して、私が日本で生活する日々は当たり前のことのように思っていましたが「それは違う」ということを改めて感じることができました。現地に行き、実際に体験した人にしかわからないことが、沢山あるということに初めて気づかされました。

そして、私たちがスリランカに行くためにこれまで支えてきた方々に感謝しています。そして行く前までは、不安な気持ちでしたが、今はとてもスリランカに行きたい気持ちでいっぱいです。



現地の小学生と一緒に 本人：左から2番目



スリランカの交通の様子

「目標」を見つけ出せた研修

川辺高等学校 2年 鮫島 舞雪

私がこの鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加したいと思ったのには、大きな理由があります。私は将来幼児教育に携わりたいと考えているからです。私達が受けてきた教育とは違うのか、子ども達はどのような環境で成長するのかということを疑問に思い、自分の目で見たい、感じたいと思い参加することを決めました。

私は、将来のためスリランカの子ども達と触れ合いたいと感じていました。そこで現地の交流会で発表する折り紙のリーダーになりました。折り紙が子ども達に伝わるのか、一緒に楽しんでもらえるのか不安でした。他にも、子ども達に「自分が一番好きなもの」というテーマでお絵描きをしてもらうという計画を立てました。

現地のヤタワカ小学校で折り紙を披露した時です。私は大きな折り紙を使い、折り鶴の説明を行いました。子ども達にも声をかけ、一緒に折ってもらいました。しかし、スムーズに進みません。子ども達は折り紙に触れるのが初めてだからです。私も説明するだけでなくサポートにも回りました。最後、完成するまでに多くの時間がかかりましたが、作品が完成した子ども達はたくさんの笑顔を見せてくれました。子ども達へ事前に作成した折り紙をプレゼントすると子ども達は折り紙の文化に夢中のようにでした。嬉しそうに受け取ってくれたのが心に残っています。

計画していたお絵描きは村の子ども達にお願いしました。テーマ上、おもちゃやアニメのヒーローを描くのではないかと予想していました。しかし、スリランカの子ども達は周りの自然や動物などを描いていました。

この経験を通して学べたことがあります。折り紙で学んだことは、平面から立体を作り出す楽しさです。初め、紙だけでは作れないという雰囲気がありました。が、完成した時、子ども達はキラキラした目で見てくくれました。

次に、お絵描きで学ぶことができたのは環境の違いと感性の豊かさです。私は、今の日本の子ども達はテレビやスマートフォンなどといったインターネット機器などに囲まれながら生活していると感じます。そのため予想

はおもちゃやアニメ、ゲームといったインターネットが関わっているものでした。また、感性の違いは大きかったです。スリランカの子ども達は自然がある環境でのびのびと育っていると感じました。日本の子ども達はインターネット機器の発達により生活が楽になったり、楽しさを求めたり、きっとこれが関係しているのだろうと考えます。これらは私がスリランカで学ぶことができたものです。

今回の研修を通して、改めて幼児教育に携わりたいと強く感じました。平面から立体を作り出す楽しさをたくさんのお子様にも知ってもらいたい、楽しさに気付いてもらえるようサポートをしたい、一人一人の感性に少しでも気づき伸ばしたい、支えていきたいという思いが出てきました。私は今まで幼児教育と言っても何がしたいのか、何を学びたいのか悩んでいましたが、今回の研修を通して、私は大きな目標が見つかりました。子ども一人ひとりにしっかりと向き合い、伸びていく子どもを支えたいということです。目標が見えていなかった私にこの研修は目標を見つけるという人生の大きな選択になりました。その目標に向かうためには自分が今何をするべきなのか考え行動し実現していくたいと思います。



現地小学校との交流の様子



お絵かきをしている現地の子ども達の様子

団員が感じたこと

初めての経験

川辺高等学校 2年 今村 心美

アーユボーワン、マグ ナマ ココミ。

私は、異文化を自分自身で体験するとともに、日本の文化を現地の方々に紹介したいという思いからスリランカを訪れました。

スリランカの方々はとても優しく、街中で目が合ったときには、みんな笑顔を返してくれます。スリランカでの約1週間の生活は、毎日が新鮮でとても良い経験になりました。特にホームステイ中の4日間は、初めて見るものや体験することばかりで五感をフルに活用しました。ホストファミリーは、全く知らない日本人の私を温かく迎えてくれました。そして、どこに行くにしてもずっと手を握って引っ張ってくれたり、私が伝えようとしていることを一生懸命理解しようしてくれたりと、4日間という短い時間でしたが、スリランカの方々の優しさや心の温かさを感じました。

スリランカを訪れて私は、その土地に住む人々で幸せのかたちは、それぞれ違うということを初めて実感しました。出発前、私は「スリランカは発展途上国だから国民はみんな貧しい生活をしているだろう」と思っていました。しかし、空港を出ると日本車が走っていて、高いビルや建設中の建物があり、私の想像とは全く異なりました。

そして、私はホームステイを通してスリランカの日常の文化を体験しました。私がお世話になったホームステイ先は、エアコンがなかったり、シャワーやトイレが外にあったりと、不便だと思うこともありましたが、それは日本から来た私だけであって、現地の方々にとっては当たり前の生活です。他にも、朝はスクールの音で目が覚めたり、村人同士とても仲が良かったり、1日に紅茶を何杯も飲んだりすることはスリランカの文化であり、ごく普通の生活でした。実際にみんな不自由なく毎日楽しそうに暮らしていました。私も3日目くらいから慣れてきて異文化を体験することにわくわくしていました。そして、私はこの経験から、私たちの日本での普段の生活は当たり前なものではなく、とても恵まれているということを再認識しました。

また、私は今回の研修中にスリランカと日本の歴史についても学びました。

「憎しみは憎しみによって止まず、ただ愛によって止む」これは、1951年サンフランシスコ講話会議にて、ジャヤワルダナ元大統領が言った言葉です。この言葉によって日本分割占領案がなくなり、日本はどの国からも支配されることなく、現在私たちは日本で生活できています。私はこのことを知り、スリランカと日本の深い関係に感謝すべきだと思いました。また、日本人でも、この歴史を知らない人は多いと思います。より多くの人々にこのスリランカとの歴史を知つてもらいたい、これからスリランカの発展に向けてスリランカとの友好関係をさらに深め、日本は、もっと協力していくべきだと思いました。

最後に、私は鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加させていただき、本当に貴重な体験をすることができました。発展途上国の現状を生で見て体験し、実際に青年海外協力隊の方々のお話を聞かせていただき、私も将来青年海外協力隊として、途上国の発展のサポートをしたいと考えるようになりました。また、今回の活動を通して自分が見たこと感じたことをクラスメイトや地域の方々など、より多くの日本に住む方に伝えたいと思います。そうすることで、異文化交流や発展途上国の現状について知ってもらいたいです。

ストゥティ。



ヤシの実ジュースを準備している様子



ホストファミリーと一緒に 本人：左

スリランカ研修で変わった自分の夢

鹿屋農業高等学校 3年 福田 正宗

スリランカでの研修を終えて、私の夢は変わりました。それは、将来自分の身につけた知識や技術を用いて、海外で安心安全な茶の生産を行い、さらに健康増進に役立つような商品の開発に携わる仕事に就きたいということです。もともとは安心安全な茶を生産する茶農家になりたいと考えていたのですが、今回の研修で得た二つの経験が、私の将来の目標を変化させました。

一つ目は、ホームステイでスリランカの食生活に触れたことです。スリランカの主食は米で、スパイスを使用したカレー味のスープと一緒に食べました。また、間食が多くお菓子は砂糖をたっぷりと使った甘いもの多かったです。さらに、カップ一杯の紅茶にスプーン3杯の砂糖を入れて飲むという習慣がありました。現地の学校との交流で日本茶を振る舞った際にも、砂糖は入れないのかと聞かれ、私はスリランカの食生活に驚きました。研修の中でスリランカの人々の健康状態について聞いてみました。するとスリランカの大人は肥満率がとても高く、この国の健康状態には課題があると感じました。

二つ目は、保健師の長部隊員の活動を視察したことです。長部隊員は主に食品衛生予防、感染症予防、生活習慣病に対する健康教育、保健指導を行っていました。子供にはダンスで体を動かすことを教えたり、大人にはメタボ予防や、その後のフォローアップというように、年齢によってアプローチを変えていることも知りました。長部隊員には、青年海外協力隊になろうか悩んでいた時期があったそうです。その時に先輩が「行かないで後悔するなら、行って後悔した方が良い」と言ってくれて、青年海外協力隊になろうと決めたそうです。視察の最後には「あそび心を持ち、自分の可能性を信じてください」とお言葉をいただきました。このことから、私は海外で自分の知識や技術を用いて、発展途上の国々や地域の人達の役に立とうとしている隊員の姿に強い憧れを感じました。そして、自分もこ

のような仕事をしたいと感じました。

このような経験から、私は将来海外で安心安全な茶の生産を行い、さらに健康増進に役立つような商品の開発に携わりたいと考えるようになりました。

今回の研修で、私は初めて海外に行きました。不安はとても大きかったのですが、スリランカの人達は、とても優しく私達を迎えてくださり、そのおかげで充実した研修をすることができました。特にホストファミリーは、私を家族のように大切にしてくださいました。また、スリランカのヌワラエリアという紅茶の産地にも連れて行ってくださいました。このことから、より発展途上の国々の役に立ちたいと思うようになりました。このような人々の優しさに触れたことで、より農業に詳しくなり、知識や技術を習得し、将来現場などで活かして、多くの人の笑顔を守れるような仕事をしたいと考えています。



茶畠でホストファミリーと一緒に 本人：右



現地の子ども達と一緒に 本人：中央

団員が感じたこと

スリランカに触れて

鹿児島高等学校 2年 今別府 幸芽

私が、スリランカに行って一番印象に残っているのは子ども達の笑顔です。

自由行動の日、偶然親戚の子ども達と遊ぶことになりました。子ども達は林を自由に走り、声を上げて、本当に楽しそうに笑っていました。気づけば私も彼らに混ざって遊んでいて、今までになく楽しかったのを覚えています。

これまで年下の子ども達と交流がなかった私にとって、それは、大きな出来事でした。日本に帰ってきてからその事をよく思い出していましたが、最近では彼らのような眩しい笑顔を沢山の子ども達から引き出したいと考えるようになりました。これをきっかけに自分の将来についてもう少し深く考えてみようと思いました。

青年海外協力隊として派遣されている山尾さんは「スリランカの人達は、他の外国の現状を知らないから自分達が一番だと考えていることが多い」と仰っていました。スリランカの人達の意識の違いを大いに感じましたが、それ以前に日本から見ればあれが無い、これが無い、というものは、スリランカに無くても幸せな生活ができる、という事実がありました。そして実際、物が無くとも良い生活ができるものだな、と受け入れられる生活を送ることができました。スリランカでの生活から、日本は便利すぎるのかもしれない、と思うようになりました。日本は他国から沢山の物が伝わり、急速に発展し、利便性・効率性を求めて1日1日で何かが変わっていく生活です。スリランカはスリランカの独自の文化があり、何かが足りない、不便だ、と感じることのない安定した生活を送っています。2国を見て、違いはあるけど、それがその国の幸せであるということを、相手側に立って初めて気づきました。それは決して相手を下に見て、可哀想だ、などと思いながら気づくことではないでしょう。この研修で他国への視点の置き方、自分の国の考え方など大きな変化がありました。

こうして素晴らしい体験に参加できたのも研修に行くことを快く承諾してくれた両親のお陰です。一週間無事を祈りながら待っていてくれた両親にはとても感謝しています。また、スリランカへ行くことを後押ししてくださった顧問や先生方、面接の練習をしてくれた同級生達、昨年の経験を伝えてくれた友達、習い事の先生、本当にありがとうございました。2回の研修と7泊8日という短い期間でしたが、団員の皆さんには色々な相談にのってもらったり、たくさん話がてきて、意見の交換や思い出をつくることができました。同行者の方々のお話は、自分の為になることだったり、自分の将来を考える時にとても参考になる意見がありました。たくさんの人に支えられて、成長できました。関わってくださった全ての方に感謝を伝えたいです。



現地の子ども達と一緒に 本人：右



ホストシスターの2人

ぼくの挑戦

赤徳中学校 1年 德永 隼也

「言葉が通じなくても音楽で心が通じた。」と担任の先生が、ミャンマーの中学校で音楽を教えた話をしてくれた。僕は奄美の伝統である島唄を習っている。僕も大好きな島唄を紹介し、外国人の人と交流してみたい。そして、海外で活躍している人の様子を見てみたいと思い、この事業に参加した。

僕は、初めてのホームステイに不安でいっぱいだった。ホストファミリーとうまく話せるか、生活に馴染めるかとても心配だった。

「アユボーワーン。(こんにちは)」
ニコニコして温かく迎えてくれたホストファミリー。早速覚えたてのシンハラ語で自己紹介をした。何とか通じてうれしかった。でも、その後の話がつながらなかった。伝えたいことがあるのに言葉が分からぬ。伝えられない。気がつけば、一人でボーッと座っていた。そんな時、僕を助けてくれたのが島唄だった。僕は三味線を持ってきて、島唄を唄うことにした。みんなが不思議そうに見てきたので、なんだか胸がドキッとした。でも、自分がまずは楽しく唄うことが大切だと思い、思いっきり弾いて唄った。すると、初めて聴く島唄に合わせて、手拍子をして楽しそうに聴いてくれた。

「ホンダイ(いいね)、ホンダイ」

とみんなが笑顔で褒めてくれた。ぼくもホッとして笑顔になった。それから、ホストブラザーに三味線を教え、家族とも会話が広がってきた。おまけに、近所の人までたくさん集まってきて、いつの間にかコンサート会場のようになっていた。島唄という音楽を通して心が通じ合えた。そして、何よりもうれしかったのが、僕の周りに笑顔がいっぱいにあふれていたことだった。

僕には、将来医者になりたいという夢がある。青年海外協力隊として活動する保健師の長部さんの視察はとても興味深かった。コロンボ市内を見渡すと高層ビルが多く立ち並び、医療も発達しているのだろうと思っていた。しかし、長部さんの話を聞いて、スリラ

ンカの医療の現状に驚いた。実際は医療技術は低く、十分な器具も治療も受けられないのだ。スリランカに派遣されている日本人も、病気にかかったら日本に帰って治療するのだという。僕は動揺を隠せなかった。世界には、恵まれない環境の中で生活している人がたくさんいる。僕は、発展途上国の医療をもっと知りたい。そして、病気で困っている人を助けたいという気持ちがますます強くなった。

現地の人に溶け込み、共に働く青年海外協力隊員の姿を見て、僕はうらやましく思った。まずは、相手の文化や習慣を理解し、受け入れることが、国際理解への第一歩になると思った。

僕はこの研修でスリランカの人の温かさに触れ、自分を見つめ直すことができた。将来は青年海外協力隊の一員になって、世界中の苦しんでいる人々を助け、たくさん的人に笑顔を与えられる人になりたい。そして、いろいろな事に挑戦して世界に羽ばたきたい。ぼくの挑戦は今始まったばかりだ。



ホストブラザーと一緒に 本人：左



島唄を通しての交流の様子 本人：左

第27回 鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
事務局長 弓場 秋信

香港経由で真夜中のコロンボ国際空港到着から一夜明けたホテルでの目覚めは眼下に広がるインド洋の波の音と、車両の連結部分まで乗客を乗せて海岸線を走る鉄道の汽笛であった。朝食会場で団員を待っていると、みんな元気にシンハラ語で「アーユーボーワン」(お早うございます)と返してきた。

活気あふれるエネルギーッシュなスリランカ最大の都市コロンボを離れ、内陸部に位置するホームステイ先へと向かった。途切ることのない建物・行きかう車、40数kmの距離を2時間近く要し、縁に包まれた農村地帯ウラポラ地区ミーガルラ村に到着した。団員同行者の顔写真が印刷された大きな横幕に迎えられホームステイ先との対面式に臨んだ。

移動中のバスの中で、現地で披露予定のスリランカの歌を声高に歌い笑顔が見えていた団員は、これから始まる一人でのホームステイを前に緊張と不安な様子がうかがえる。迎えの家族と一緒に夫々の家路についていた後、全ての家15軒を訪問した。住環境のチェック、団員の様子伺い、そして受け入れ家族への感謝を伝えるためである。団員は「指さし会話帳」を使いながらシンハラ語とジェスチャーで自己紹介や持参した土産・写真等で家族と楽しく過ごしていた。

ホームステイ期間中に、動物学で青年海外協力隊員としてコロンボ市郊外の国立デヒワラ国立動物園で活動中の山尾紗代さんの現場を訪問した。民族衣装サリーをまとい出迎えた山尾さんの案内で動物園内を見学。担当である動物の食について説明の後、日常生活や協力隊参加の動機等について話してくれた。そして質疑応答では時間の関係で団員からの質問にストップをかけざるを得ないほどであった。

内陸部ケゴール県の保健所で保健師として活動中の長部千寿隊員は、日本の自治体からの現職参加。食生活からくる生活習慣病の改善に使命感を持って取り組んでいる。30分の予定で話をしてもらっていたが、医療関係で協力隊員を目指す団員の熱い視線を浴び予

定の倍の時間、協力隊参加までの道のりと現在の活動について話してくれた。

二人の協力隊員活動現場訪問やJICAスリランカ事務所でのブリーフィングを通じて団員は、青年海外協力隊事業について理解が深まると共に、将来の進路の一つに加えたようである。

中学一年生から高校三年生までの15名。誰一人現地で体調を崩すことなく、予定のスケジュールをより充実した実りの多い内容にした15名を頼もしく感じた。そしてそれを支えた同行者3名。パスポート、お金の管理そして音響担当の徳田さん、先生役として団員を先導した林さん、健康管理の傍らで記録係の上野さん。素晴らしいチームワークでした。マスコミから参加の緒方さんと下山さんの精力的な取材活動は、まさにプロの仕事を見る機会となりました。

15名の団員とミーガルラ村の素晴らしい未来に乾杯。



全団員の顔写真入横幕



村の僧侶と一緒に 本人：前列左から2番目



お別れパーティーにて 本人：2列目左から2番目

同行者が感じたこと

見覚えのある風景

(公財)鹿児島県国際交流協会
総務企画課長 德田 洋

「7月にスリランカに行ってもらう」4月の異動が決まり、事務の引継を受けた際の前任者の言葉だ。スリランカに対する予備知識は全くなかったが、中国での駐在経験があるので、不安より好奇心が勝り、早く行きたいと思は募るが、日々の業務に忙殺され、シンハラ語の勉強もままならないまま、出発の朝を迎えた。

中心都市のコロンボから、ホームステイしたミーガルラ村へは、バスで2時間弱であったが、都市部を抜けた道中には、既視感のある風景が広がっていた。車は左側通行で日本と同じだし、輸入されたであろう日本製の中古車が行き交っている。椰子の木が実を付け密生して生えていたりと植生は異なるのだが、鹿児島ほど暑くなく、山あいの緑豊かな風景に、あまり異国情を感じることはなかった。

ホームステイさせていただいたお宅は、周りを緑に囲まれ、広い庭があり、まるで田舎の祖母宅を訪ねたようなそんな雰囲気があった。井戸水のシャワーやバケツの水で流すトイレにとまどいつつも、ベッドを与えられ、それほど不自由を感じることなく、4日間のホームステイを過ごすことができた。朝は、奥さんが入れてくれる甘いティー(ミルクティー)を飲むのが日課になり、食事も3食ともカレーではあったが、具材やスパイスを変え、アレンジされており、飽きることなく食べることができた。

さて、団員はというと、ホームステイ初日の対面式の際は、不安げな様子を浮かべていたが、4日間の間に、思っていた以上に打ち解け、交流を楽しんでいた。シンハラ語に悪戦苦闘しながらも、指さし会話帳をフル活用し、コミュニケーションをとっている姿には、感心した。最終日には、当初ぎこちなかった団員が別れを惜しむ姿が印象的であった。若いうちから、このような異文化体験ができたことは、これから的人生にとって、非常に有益となるであろう。国際交流に携わる身としては、彼らがこれから「鹿児島の国際交流」

を支えていく人材になってくれることを確信した。

同行したガイドは、現在のスリランカは、50年前の日本と同じくらいと説明したが、街の活気は、これから成長を感じさせるものであった。また、インド洋の要衝であるスリランカでは、中国の一帯一路構想を受け、中国資本による都市やホテルの建設などインフラ整備が進んでおり、アジアにおける中国の存在感をあらためて見せつけられたような感じであった。

日本からはるかに遠く、移動にも相当な時間がかかり、過酷な旅程ではあったが、このような貴重な体験ができたことをうれしく思う。快く送り出してくれた上司、同僚をはじめ、共催の各市、協賛企業、また、JICA事務所の皆さん、現地の青年海外協力隊員の皆さん、そして何よりも私たち一行を温かく受け入れてくれたミーガルラ村の皆さんなど、本事業を支えてくださった多くの方々に感謝するとともに、密度の濃い時間を共に過ごした団員及び同行者の皆さんにもお礼を述べたい。



ホストファミリー宅



村の協力者のみなさん 本人：後列右から2番目

同行者が感じたこと

スリランカ体験事業を終えて

青年海外協力隊スリランカ OG 林 裕佳
(現 クラーク記念国際高等学校 教諭)

スリランカと聞いてどんなイメージが思い浮かぶだろうか？私は以前、青年海外協力隊の日本語教師としてスリランカに赴任していた。スリランカは私の大好きな国である。

今年3月、団長の弓場さんから電話があり、今年度の派遣先はスリランカになるということを聞いた。その時、すぐに「引率したい！」と思った。それは、自分が青年海外協力隊として活動した、大好きな国を子どもたちに見てほしいと感じたからだ。絶対にスリランカの人たちは子どもたちを助けてくれるだろうし、お互いに学び合えるはずである。スリランカが、子どもたちが世界とのつながりを感じるきっかけになってほしいと思っている。

今回、引率をしていて本当に感心したことがある。それは、子どもたちの可能性だ。初日の夜は不安そうな顔をしていたのに、二日目、三日目にはホストファミリーとこんなことをした、あんなことをしたと話してくれた。自らホストファミリーと関わっていこうというコミュニケーション能力の高さは本当に素晴らしい。また、外での水浴びという日本とは異なる環境で、スリランカ人の方法を自ら真似してみようとする異文化への順応性の高さ。さらには、常に主体的に受け身にならない積極的な姿勢。青年海外協力隊の活動視察において次々と質問する、メモをきちんととるなどの姿勢に意識の高さが感じられるとともに、その姿を見たスリランカ人や隊員が感心していた。

このように子どもたちが安心して滞在し、力を発揮できたのは、ホストファミリーや地域の力によるところが大きい。村での対面式のときのセレモニー、学校交流のときのブラスバンドによるお出迎えなど、本当に村、地域全体でおもてなしをしてくれ、本当に感動した。子どもたちは一気にスリランカが好きになり、スリランカに溶け込んでいこうという力になっていたはずだ。

また、今回の体験事業の中で子どもたちに知ってほしいと思っていたこと。それは、日本の戦後復興を助

けたのはスリランカであるということだ。サンフランシスコ講和会議における、後のジャヤワルダナ大統領の「憎悪は憎悪によって止むことはない。」というスピーチによって日本は分割されなかったということ。JRジャヤワルダナセンターで子どもたちは真剣に展示物に向き合い、日本とスリランカとのつながりを感じていたと思う。私たちの今の生活は、多くの国々との関わりの上に成り立っていることを実感するきっかけになったはずだ。

この体験事業は子どもたちが自分自身で、様々なつながりを築くことのできた訪問だったと思う。スリランカと日本にお互い顔を思い浮かべられる人がいる。このつながりが、絶対に子どもたちがこれから社会に、世界に飛び出していくときの力になる。さらにいろいろな国々と強いつながりを生み出すことができる力を今回の子どもたちは持っていると思う。

今回、子どもたちとスリランカに行くという貴重な機会をいただき、私自身も本当に学ぶことが多かった。このような機会を作ってくださった事務局、関係各所の方々に感謝するとともに、参加した子どもたちの今後に期待をしている。



嬉しいサプライズ



村のお母さんたちと一緒に 本人：左から2番目

国際協力体験事業に参加して

青年海外協力隊バヌアツ OG 上野 陽子
(現 十島村役場 保健師)

健康管理員としてスリランカに行くお話をいただいた時、わくわくする気持ちもあったが、いささかためらいがあったことも事実である。何よりも、いまだにデング熱や様々な感染症が残っていること。また、普段の仕事上、高齢者との関わりが多く、多感な時期である中高生と関わったことがないこと。団員と上手く打ち解けることができるだろうか…。しかし、そうした難しさがあるからこそ、この事業に参加する意味もある。そう思いこの事業に参加した。

言葉が通じない中でのホームステイ。私は、「きっと壁にぶつかり相談してくる団員がいるだろう。」そう予測していた。団員たちは最初、緊張しているのか笑顔もぎこちなく、口数も少なかったからだ。しかし、その予測はくつがえされた。団員たちは、ぎこちない接近を何度も繰り返すうちに、指さし会話帳やボディーランゲージを交えながら少しずつコミュニケーションを取り始めていた。スリランカの人々と話をするとき団員は、相手の言葉を理解しようと真剣なまなざしで相手を見つめていた。時折、声を出して一緒に笑う姿も見られた。思うようなコミュニケーションが取れず不安そうな表情を浮かべていた先ほどから、そういう時間も経っていないのに、いつの間にか自分のペースで人々と関係を築いている様子を見たとき、私は団員の潜在的な能力の高さに気付かされた。団員たちは心と心でつながる方法を見つける力を持っていたのだ。

旅も終りに近づいた頃、ある団員がこう言った。「この国の人にとって、幸せってなんなのだろう。」…この言葉を聞き、その人々が幸せなのかどうかを自分の視点だけで考えるのではなく、相手の視点にたって考えようとしているのだとわかった。「国際的である」とは、外国語に通じていることでも、海外の生活習慣に詳しいことでもない。自分とは違う立場、それも複数の、しばしば対立や矛盾をはらむ立場を理解する感受性を持つこと、より厳密に言えば、その感受性を持つとする意志と忍耐だと私は思う。この団員の心には

その意志があったように思う。きっと、この団員に限らず、多くの団員が同じような思いを抱いたことだろう。わずか8日の間に何という成長を遂げたのだろう。ふと周りに目をやると、あの顔もこの顔も、その目は8日前とは明らかに違っていた。子どもってすごい、子どもの可能性は無限大だ。そう心の底から思えた。刺激を受けた私は、いい年であるが、まだまだ私も、と勝手にパワーをもらっていた。

何よりも、団員が病気や怪我ひとつなく、無事に帰国することが出来て心から安心した。こんなに暇な健康管理員は初めてだそうだ。これも、事前に団員の健康管理に注意して、準備してくださったご家族、事務局の皆様のおかげである。また、弓場会長はじめ、気さくな同行者の方々であったことも非常に救いであった。この事業に関わった全てのみなさまに心から感謝申し上げます。ストゥーティー！



村の子どもたちと一緒に 本人：左から2番目



小学校交流の様子

► 同行者が感じたこと

スリランカに魅せられて

南日本新聞社報道部 記者 緒方 隆

これまで海外は何ヵ国も訪れたが、先進国ばかり。事前研修で言葉を習っても、自分が知る言語圏とは全く違い、頭に入らない。リズム感で何とか覚えたシンハラ語は「アーユーボーワン(こんにちは)」と「マゲナマ(私の名前は)」だけ。不安だらけのスリランカ行きだった。

同国では、内戦が2009年まで23年間も続いた。主権を握るシンハラ人に反発し、タミル人が独立を目指したことが要因だ。街の中にはぎすぎすした雰囲気もあるのだろうと思ったが、出会う人は人種にかかわらず、穏やかな笑顔で迎えてくれる。そんな優しさに触れ、不安は消えた。

海外は初めてという生徒が多かったが、若さゆえの適応力の高さには驚かされた。同国最大の都市、コロンボに到着したのは深夜。朝を迎える車や三輪タクシーで騒然とする街の雰囲気に気おされたのは最初だけだった。ホームステイ先でトイレットペーパーのないトイレに出くわしても、シャワーが屋外で水しか出なくとも、すぐになじんでいった。

ホストファミリーの尽力もある。私たちの話を粘り強く聞き、ゆっくり語りかけてくれた。お互いを知りたいという心一つで、“言葉の壁”は簡単に乗り越えられることに生徒も気づいただろう。

青年海外協力隊員との交流では、日本との違いを学んだ。動物園職員には日本のレベルとはほど遠い衛生管理について、保健師からは食生活に由来する地域特有の病気などについて説明を受けた。危険と隣り合わせの仕事もあると聞きながら、「いつか私も途上国の役に立ちたい」という声が上がったことは、今回の国際協力体験事業が意義あるものだったことを裏付ける。中にはスポーツで貢献できると聞き、勇気づけられた生徒もいた。

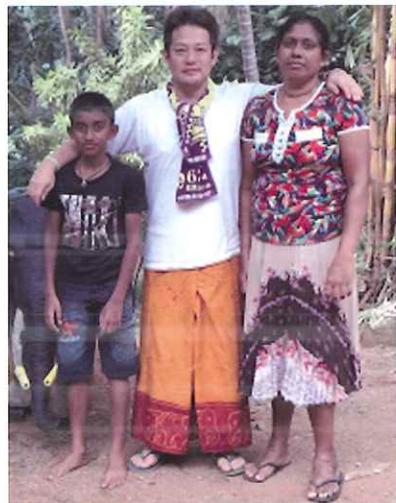
地元ガイド、ニハールさんが印象に残る言葉を教えてくれた。「憎しみは憎しみで消えず、愛することで消える」。1951年、サンフランシスコ講和会議に出席したセイロン(今のスリランカ)の大蔵が平和を願

い、演説で述べた一節だという。仏教の教えが基になっており、日本に賠償を求める、戦後復興を後押ししたとされる。両国に深いつながりがあることを知った。

一方で、コロンボの街を見渡すと、アジアの大國の“足音”を感じられた。仏教の象徴であるハスを模した放送通信・観光タワーや高層ビルの建設など、中国企業の進出が近年相次ぐ。インドやパキスタンを擁する南アジアの平和が、微妙なバランスの上に成り立っていることを改めて考えさせられた。

滞在1週間で「ストゥティ(ありがとう)」「ラサイ(おいしい)」「サライ(辛い)」と、いくつかのシンハラ語がすんなり言えるようになった。自宅で「HINA HEVII」の歌を口ずさむこともある。もちろん「DOOL BABABA」のフレーズは特に力を込めて。すっかりスリランカに魅了された。

将来はシニア青年海外協力隊員に、などと思ってしまうほど貴重な経験をさせていただき、関係者の方たちに感謝したい。



ホストファミリーと一緒に 本人：中央



取材中の様子

スリランカでの日々を思い出しながら

南日本放送 記者 下山 優

「海外出張案件があるけど、どうけ？」上司の一言ですべては始まった。出張取材はよくあるものの、報道記者10年目の私にとって海外出張は初めての経験。「いいっすねー！行きたいです！」勢いで返事をした私に告げられた国名は「スリランカ」だった。ウィッキーさんしか思い浮かばなかった（中高生はわからないかも）

出発前の研修等で、現地では毎日カレーを食べること、食事は手で行うことなど知った時は「中々ない経験だし、楽しみだな」とそこまで驚かなかったが、トイレの画像を見た時は今回の出張を快諾したことを少しだけ後悔した…。案の定我々のホームステイ先もそのタイプだった。和式の汲み取り便所の脇にシャワー・ヘッドとバケツが置いてある、ペーパーはない。鹿児島から持参した9か月になる次男のおしり拭き、大活躍。

中心都市コロンボは都市化が進んでいた。中国企業などにより高層ビルが次々と建設中で「開発途上国」という言葉と現実とのギャップを感じた。一方、ホームステイ先で目にしたのは、育つ植物や土の色、景色は違うものの鹿児島にもあるような農村だった。しかし、風景は似ても経済状況は違う。集落の平均月収は日本円でおよそ2万円。集落の商店で購入した500mlの炭酸飲料は90スリランカルピー→日本円で62円。350mlの缶ビール（買ってません！）250ルピー→日本円で170円。仮に日本での平均月収を20万円とした時に、ジュースが620円、ビールが1700円で売っているとすると、集落の経済状況をイメージしやすいかもしれない。なかなか買えたもんじゃない。

今回の私の役目は、現地で手探りで交流する中高生を取材すること。みんなの表情や声、異文化を目の当たりにした時のリアクションを記録し続けた。積極的に交流し何かを学び取ろうとする姿勢に引き込まれ、一瞬一瞬を記録することに夢中になりすぎてしまい映像素材は7時間以上になった。

6500キロ離れた異国の地でレンズ越しに感じたことは、文化は違えど人々の笑顔は同じだということだった。お互い言葉がほとんど通じない分、私たちはいつも笑顔だった気がする。コミュニケーションに言

葉は重要なツールだが、それ以上に表情や伝えようとする気持ちが一番大切だということに改めて気づかされた。みんなの現地での奮闘ぶりやその空気感を、ご家族をはじめ視聴者にどれだけ伝えられたかは分からないが、私にとって今回の同行取材は、人とかかわる仕事が基本の記者として、また個人としても新たな価値観や考え方方に気づかされたものだった。

価値観の話でもう1つ。道中、現地通訳の『モモタロウのお父さん』がスリランカ人の信仰心や慈悲深さを力説してくれたが、その傍らの運転手をはじめ、町中のドライバーの運転にはほとんど思いやりが感じられなかっ…。ブッダに習い、もう少し愛をこめてハンドルを握れないものかと思ったのは私だけではないはずだ。

平成最後の夏にスリランカで見た交通渋滞と現地の人々の笑顔、15人の好奇心を忘ることはないと思う。最後になりましたが、27年にわたり事業を続けられている弓場会長はじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。そして15人のみんな、スリランカの皆さん、素敵な時間を本当にありがとうございました！



取材中の様子



ホストファミリーと一緒に 本人：中央

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 楽　　旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：独立行政法人国際協力機構九州センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

6 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタキナバル、セマラク)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、阿久根市、名瀬市、市来町、伊集院町、 祁答院町、内之浦町、佐多町	公募
第2回	マレーシア (スマラバッラ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、鹿屋市、大口市、指宿市、 隼人町	公募
第3回	マレーシア (ケソン、テガ・アイル)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、加世田市、三島村、隼人町、志布志町、 高山町	公募
第4回	インドネシア (バッドン、バシルカット)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市、出水市、指宿市、垂水市、菱刈町、 霧島町	公募
第5回	マレーシア (コタキナバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市、国分市、穂枝町、宮之城町、隼人町、 吾平町、根占町、中種子町	公募
第6回	マレーシア (タビン、パリットムントリー)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市、串木野市、東市来町、伊集院町、郡 山町、日吉町、吹上町、金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (ケソン、テガ・アイル)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市、大口市、国分市、菱刈町、 姶良町、蒲生町、溝辺町、横川町、 栗野町、吉松町、牧園町、隼人町、福山町	市町村推薦
第8回	タイ (ヨウタ、ムンカオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市、指宿市、加世田市、喜入町、 笠沙町、知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チエンマイ、メークンソン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、国分市、垂水市、 祁答院町、財部町、末吉町、串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチミン、フーコイ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市、出水市、加世田市、国分市、垂水市、 祁答院町、溝辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチミン、ダナン)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市、串木野市、枕崎市、国分市、垂水市、 溝辺町	市町村推薦
第12回	タイ (ナコンラチャシマ県を予定していた)	平成15年度 SARS及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (ケラル州、マラッカ州、トレンドン)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市、枕崎市、国分市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム (ハノイ、ホーチミン省モーライ村)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、枕崎市、串木野市、国分市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア (ケラル州、マラッカ州、サバ州)	平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、知覧町 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム (ハノイ、バカイエン省、バケン省)	平成19年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県ボンニー村)	平成20年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県ナーツ村)	平成21年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、いちき串木野市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシ州ビハラサ村)	平成22年 8/1(日)～8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、南さ つま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア (ケラル州サバ・ランガム村)	平成23年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム (ホーチミン市、ティエンザン省ゲイントイ村)	平成24年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、 南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム (ダナン市、ホーチミン市)	平成25年 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア (プノンペン、バッソウ)	平成26年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	23名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア (プノンペン、カンボジア)	平成27年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス (ビエンチャン都、ビエンチャン県)	平成28年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南さつま市、南 九州市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第26回	ラオス (ビエンチャン都、ビエンチャン県)	平成29年 7/23(日)～7/30(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、いちき串木野市、 南九州市、南さつま市、枕崎市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第27回	スリランカ (西部州、ガンバハ県)	平成30年 7/25(水)～8/1(水) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南九州市、南さつま市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計7カ国	計(346)	平均13人		



=編集・発行=
鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町 14-50

かごしま県民交流センター 1階

公益財団法人鹿児島県国際交流協会内

担当：酒井 恵、外西 朋子

TEL: 099-221-6620 FAX: 099-221-6643

裏表紙デザイン：今別府 幸芽（鹿児島高等学校 2年）